ての思いを強くする。

保健師、岩手医大医学部助

会長」…。数々の肩書をひっ 教、自称「第1回親バカ大会

中高生向け保健講話や

しかしてないので、家で『お

田市に勤務。退職して秋田市

人の復興」に、画一的な答

てほしい。

Si

はならない。佐々木亮平さん うと、考えることを放棄して 多くの難題が待ち受ける。 の復興が大詰めの東日本大震 災被災地では、その先の「 クア、自死予防…。 ハード面 公営住宅入居者らの孤立防 生き方に学べば学ぶほど、 一人の復興」実現に向け、 どれほど解決が困難であろ 生活再建格差への対応、災 で、長女の名は楽夢、長男楽

さん。いつも楽しそうだ。 はじめ各地を駆け回る佐々木 市民講座などで、陸前高田市 人生楽しもうというわけ の今なお、陸前高田市に通い 市の「はまってけらいん、か 続けているためでもある。同 のは、震災から間もなく9年 風呂さん』と呼ばれてます。 ただ、なかなか家に帰れない 講演はいつもこんな調子。

だってけらいん(集まろう、 思いに加え、「つながりは一 波の犠牲になった元同僚への 陸前高田が近くなった」。津 後、岩手医大に転職し「少し めて1年後、震災が起きた。 田看護大で教員の道を歩み始 直後から支援に奔走。その 陸前高田市のコラボレーショ

に新居を構え、日本赤十字秋 が湧いてくる。佐々木さんと はずだ。この8年余、模索し 災害時の長期的な支援モデル 続けた経験に学ぶことで、力 だが、決して無力ではない

てきたつながりが、困難に立 ンをはじめ、沿岸各地で培っ

「共に考える力」今こそ

どもをお風呂に入れるくらい ながり)をつくってね、と」 末、楽胤。楽しくライン(つ ず、妻に頭が上がらない。子 煉、次男楽節。三男は悩んだ しみすぎて秋田市の家に帰れ そんな私は好き勝手に楽 ドバイザーとして、住民交流
う自覚も背中を後押しする。 語り合おう)」運動の推進ア なぜここまでできるのか。 の場づくりなどに心を砕く。 保健所を経て3年間、陸前高 盛岡市出身。久慈、大船渡 44歳。まだ若いとはいえ、

朝一夕には生まれない」とい とをする。私もその一人」 共有し、考え続け、できるこ い、経験を学び合い、問いを 震災9年、10年…。「一人 「一人一人が本音で語り合 の真価を発揮する1年になっ まな未来図を描く。共に学び、 共に考え、共に生きる。蓄積 充実から、高齢者や障害者ら に胸襟を開き、子育て環境の の居場所づくりまで、さまざ 解決できない。個と個が互い ち向かう力になってくれる。 個」が「孤」のままでは